

「単なる概念 (der bloße Begriff)」の二義性

——カントの「超越論的哲学」を理解するための端緒として——

佐藤慶太

はじめに

「超越論的哲学 (Transzendentalphilosophie)」は、カントが自らの認識批判の試み特徴づけるために用いた概念であるとして一般に理解されているし、⁽¹⁾カントの生前においても既にそうだった。⁽²⁾しかしカント自身が『純粹理性批判』においてこの概念に与えた位置は、一般的な理解とは必ずしも重なり合わない。まず指摘できるのは、カントがカント以前の哲学を「超越論的哲学」と呼ぶ場合がある、ということである。例えば「超越論的分析論」の末尾、いわゆる「無の表」の箇所、「超越論的哲学がそこから始められるのが常である、最高概念は、概して可能なものと不可能なものとの区分である」(A290/B346、傍点筆者)⁽³⁾とカントがいうとき、念頭におかれているのはヴォルフやバウムガルテン(いわゆる「講壇形而上学」)の存在論である。⁽⁴⁾彼らは『純粹理性批判』の仮想敵というべき哲学者たちであるが、その哲学者たちの手続きが「超越論的哲学」と呼ばれることもあるのだ。⁽⁵⁾

他方、カントが自らの哲学を特徴づけるために「超越論的哲学」という概念を用いる場合でも、一般的な理解とカントの理解との間にズレがある。「序論」において「超越論的哲学」は「対象一般についてのわれわれのア・プリオリな概念」の「体系」(A12)と定義されるが、これは「純粹理性批判」の手続きとは区別される。『純粹理性批判』は「超

越論的哲学の完備的構想」(A14/B28)ではあるが、「超越論的哲学」そのものではなく、その「準備学 (Propädeutik)」(A841/B869)でしかない。

このようにカント自身の理解に基づくならば、批判されるべきもの及び目指されるべきものという二つの「超越論的哲学」があることになる。だが二つの「超越論的哲学」に同一の名称が付与されうる理由や、両者の違いについて、カントは何も述べていない。

少々意外な感を与えるかも知れないが、本稿ではこの問題を説明するための端緒として、「単なる概念 (der bloße Begriff)」という語について考察する。⁽⁶⁾一見なんの問題も含まないかのように見えるこの語と、特に、大きく二つに分かれるその用法に、カントは非常に重大な意味を担わせているのである。

「単なる概念」の用法に注目する場合にまず気づかされるのは、それが斥けるべきものとして取り扱われる場合と、カントの哲学を説明する道具立てとして登場する場合がある、ということである。この外見上の用語法の揺れをカントの粗雑さに帰すことはできない。先取りすると、そこには講壇形而上学における「概念」を批判しつつ、カント固有の「概念」を新たに基礎づけようとする一連の運動が表れている。つまり、この「単なる概念」の用法の揺れは、ちょうど「超越論的哲学」の用法の揺れと同一の性格および根拠をもつ。それゆえ「単なる概念」の用例の検討が、二つの「超越論的哲学」の関係を説明する手掛かりとなるのである。さらにいえば、「超越論的哲学」が「概念の体系」である以上 (cf. A12)、『カントによる「概念」の捉えなおしの内実を理解することが、二つの「超越論的哲学」の関係を説明するための必須の条件であるはずだ。しかしながら、この二種類の用法はカント自身ではまったく何の説明もなく、いわば平然として並存している。このため、従来の解釈者はカントのこの無造作な態度に巻き込まれて、同じひとつの表現であるのにそれを交わることのない二つの平行線のように取り扱ってきた。⁽⁷⁾本稿は平心に『純粹理性批判』を読むものが抱かざるを得ないあたりまえの疑問に発して、そこにカント自身が(おそらく本人にとっての自明性のゆえに)

ついに定式化することのなかった或る方向性を敢えて読み出す試みである。

一 「単なる概念」と「超越論的哲学」

「単なる概念」自体について考察するまえに、テキストから「単なる概念」と「超越論的哲学」の関係を抽出しておきたい。両者の関係は、「超越論的方法論」第三章「純粹理性の建築術」において論じられる「純粹理性の哲学」の内的区分を確認することによって明らかとなる (cf. A841ff./B869ff.)。

まずこの区分を概観してみよう。「純粹理性の哲学」は第一に「ア・プリオリな純粹認識すべてに関して理性能力を探究する準備学 (Propädeutik)」である「批判」と「純粹理性の体系 (学)」である「形而上学」に区別される。「形而上学」は、「体系的な連関をなす純粹理性に基づいたすべての (真の、ならびに見せかけの) 哲学的認識 (Wahrheit)」と定義される。形而上学はさらに理性使用の種類に応じて、「純粹理性の思弁的使用の形而上学」である「自然の形而上学」と、「純粹理性の實踐的使用の形而上学」である「人倫の形而上学」に区別される。そして自然の形而上学を構成しているのが「超越論的哲学」と「純粹理性の自然学 (Physiologie)」である。後者はさらに「合理的自然学 (die rationale Physiologie)」、「合理的宇宙論 (die rationale Kosmologie)」、「合理的神学 (die rationale Theologie)」に区別される。つまり「思弁的な理性使用の形而上学」は超越論的哲学、合理的自然学、合理的宇宙論、合理的神学という四つの部門からなる。加えて第二部門の「合理的自然学」には「合理的物理学 (physica rationalis)」と「合理的心理学 (psychologia rationalis)」という従属的な部門がある。

さて問題の「単なる概念」だが、これは「自然の形而上学」の説明において登場する。すなわち「自然の形而上学」とは「すべての諸物の理論的認識に関する単なる概念からの (したがって数学を除外した) すべての純粹理性原理を含む」(A841/B869) ものである。「超越論的哲学」は「自然の形而上学」の一部門であるから、それもまた「単なる概念

からの「純粹理性の原理を含むものである。ここに「超越論的哲学」と「単なる概念」との結びつきがある。

加えてわれわれの考察にとって重要と思われるのは、「形而上学」の定義である。先にあげたように「形而上学」は「体系的な連関をなす純粹理性に基づいたすべての（真の、ならびに見せかけの）哲学的認識」と定義されている。この括弧内の「真の、ならびに見せかけの (wahre sowohl als scheinbare)」という表現から、カントが「形而上学」に二種類の意味を認めていたことが理解できる。このように「形而上学」が二種類の意味を持つということに、「単なる概念」や「超越論的哲学」の用法の揺れも由来するといえる。なぜなら「単なる概念から」とされる「自然の形而上学」は「形而上学」の下位区分であり、「超越論的哲学」は「自然の形而上学」の一部門だからである。

そして「批判」は「形而上学」と区別される以上、二種類の「超越論的哲学」のどちらにも属さない。「批判」が第一義的には「形而上学一般」の批判 (AXII) であり、同時に形而上学の「準備学」と位置づけられるのだから、それは見せかけの「超越論的哲学」から真の「超越論的哲学」への移行そのものとして理解することができる。

二 「単なる概念」の二種類の用法

次いで、「純粹理性批判」における「単なる概念」の用例を頼りにして、否定的に取り扱われる「単なる概念」と肯定的に取り扱われる「単なる概念」の内実を吟味したい。

二・一 否定的に取り扱われる「単なる概念」

「単なる概念」は、さしあたり経験的な要素を含まず、直観との直接的な関係を欠いた概念として理解されうる。しかし立ち入って検討するならば「単なる概念」が否定的に取り扱われる場合、そこには、①すべての真なる判断を分析判断とみなすこと、②概念とその対象の現存在とを、本質的な仕方では区別しないこと、③概念的認識と感覚的知覚と

の区別を単に認識の判明性の度合いの違いに帰すこと、という特定の認識の仕方に対する批判が結び付いていることが分かる（カントの術語に即して言うと、上記の三点は①総合判断と分析判断の区別の看過、②概念とその対象の現存在の区別の看過、③概念と直観の区別の看過、である）。このことからカントが「単なる概念」について語る場合、ある具体的な論敵を念頭においていることが予想される。結論を先取りすれば、「単なる概念」は、ヴォルフ、バウムガルテンをその代表者とする、いわゆる講壇形而上学の存在論の基礎とみなされている。⁽¹¹⁾以下これを具体的に確認してみたい。⁽¹²⁾

二・一・一 分析判断と総合判断の区別の看過

……単なる概念からは (aus bloßen Begriffen) いかなる総合的認識も得られず、もっぱら分析的認識だけが得られることは明瞭である。(A47/B64f.)

これから検討する三つの箇所すべてにおいて言えることだが、「単なる概念」はカントが『純粹理性批判』において導入した「区別」との関連で登場する。そこで「単なる概念」に依拠する立場の特徴は直接的に語られるわけではないが、この立場はカントが導入した「区別」を看過している、ということが間接的に批判されていることは明らかである。さて上記の引用箇所に関して言えば、そこから読み取ることが出来る「単なる概念」に依拠する立場の特徴とは、へすべての真なる判断を分析判断とみなし、総合判断の固有性を無視する」ということになる。

ここではヴォルフを例にあげて確認してみたい。ヴォルフは、ライプニッツの「主語の名辞 (terme) は常に述語の名辞を含んでいなければならない」という主張をそのまま継承したわけではなかったが、⁽¹³⁾基本的には分析判断のみに依拠する判断論の立場をとった。たとえば数学の論証理論では、すべての真なる命題を分析的とみなす考えを基礎に据えていた。ヴォルフの論証理論の基礎をなすものは「定言的判断 (propositio categorica)」である。これは「絶対的に、すなわちいかなる附加的条件もなしに述語が主語に関して言明される」⁽¹⁴⁾命題である。定言的判断は数学の論証において、「非論証的命題 (propositio indemonstrabilis)」と「論証的命題 (propositio demonstrativa)」に区別される。前者は

「語を理解することによって、述語がその命題の主語に属するか否かが明らかになる命題」と定義され、それが「理論的 (theoreticus)」である場合 (述語が主語に内属しているかどうかが問題である場合)、「公理」である。後者は「語を理解することによって、述語がその命題の主語に属するかがまだ明らかではない命題」であり、「理論的」であるならば、「定理」と呼ばれる⁽¹⁶⁾。カントにおいて「公理」は数学においてのみ認められるア・プリオリな総合的原則だが (cf. A732/B760) ヴォルフにおいて「公理」や「定理」はすべて分析的命題である「定言的命題」へと還元されるのである。

二・一・二 概念とその対象の現存在との区別の看過

或る物の単なる概念においては (In dem bloßen Begriffe eines Dinges) その物の現存在のいかなる性格も全然見出されえない。なぜなら、たとえその概念がきわめて完備的で、或るものをあらゆるその内的規定でもって思考するために、いささかも欠けるところが無いとしても、その物の現存在はこうしたことすべてとは一切関係がない…… (A225/B272 傍点部ゲシュェルト)

この「単なる概念」についての批判的な言明において、カントが念頭においている認識の仕方は、概念とその対象の現存在を区別しないことである。これも講壇形而上学の認識論の特徴と符合する。『哲学一般』についての予備的叙説におけるヴォルフの「存在論 (ontologia)」の説明に即して、この点を確認してみよう。ヴォルフによれば心に関して、物体に関しても述語づけられる「すべての存在者に共通するいくつかのこと」がある。そしてこの「存在者一般および存在者の一般的諸性質 (affectiones generales)」を問題にする哲学の部門が「存在論」である。さてこの存在者の一般的性質とは「本質、現実存在、属性、様相、必然性、偶然性、場所、時間、完全性、秩序、単純者、複合体等の概念⁽¹⁷⁾」であるとされるが、注意したいのは一般的性質のうちに「現実存在 (existentia)」が含まれている、ということである。ヴォルフにとって「現実存在」とは、諸々の一般的性質と同格的に並べられる、「存在者」についての一つの性

質にすぎない。そしてこのヴォルフの立場こそが、「超越論的弁証論」において、「存在は明らかにレアルな述語ではない」(A598/B626)という言葉をもって「反駁される立場にはかならない」。

二・一・三 直観と概念の区別の看過

……何らかの物の単なる概念のもとでは (bei dem bloßen Begriffe von irgend einem Dinge) 直観のさまざまな必然的制約が捨象されているので、特別な性急さによって、この捨象されるものごとにも見出されないようにみなされ、物に、その概念に含まれているもの以外の何ものも許されないことになる (A281/B337f.)。

この箇所でカントが「単なる概念」との関連で批判しようとしているのは、概念的認識と感覚的知覚との区別を単に認識の判明性の度合いの違いに帰すこと(概念と直観の区別の看過)であり、これも講壇形而上学の認識論の特徴として理解される。以下、この批判の内実を確認してみよう。

基本的にヴォルフはライブニッツの認識論の立場を踏襲している。⁽¹⁸⁾つまり諸々の認識を「明晰か曖昧か」「明晰であるとするれば、判明か混濁しているか」等の規準にもとづいて階層的に区別する、という手続きである。この区別に従えば、感覚的知覚とは明晰だが混濁した認識、概念的認識は明晰かつ判明な認識、ということになる。この階層的な区別は質的な区別ではなく、われわれは表象に含まれる内容を相互に比較し、区別する「分析 (analysis)」を通じて、曖昧な認識から明晰判明な認識へと到達しようと考えられている。要するに講壇形而上学においては感覚的知覚と概念的認識とは連続的であり、両者のうちでは概念的認識がより根源的なものである、と理解されているわけである。

これに対してカントは概念的認識と感覚的知覚とが全く異種的なものであることを主張する。しかもカントはたんに講壇形而上学の認識の仕方を斥けるだけでなく、誤謬の源泉をも暴き出す。この暴露の手續きの核をなすのが、「抽象する (abstrahieren-)」と「捨象する (abstrahieren von-)」の区別であり、先の引用文もこの文脈で理解することができる。

では「抽象する」と「捨象する」の区別を通じた講壇形而上学批判の内実を、マイヤーの抽象理解⁽¹⁶⁾に対するカントの批判という形で示してみよう。マイヤーは「論理的な抽象を通じて形成される概念」(XVI 549f.) について述べる際、この概念形成の手続きを「異なった諸事物のうちにある、一致する概念を相互に対比させて、その諸物が分かち合う徴表だけを判明に表象する」(ibid.) と説明する。

それに対してカントは「われわれは共通的な徴表としてある概念を抽象する (abstrahiert einen Begriff als gemeinsames Merkmal) のではなく、ある概念の使用においてその概念のもとに含まれている差異を捨象する (abstrahiert von Verschiedenheit desjenigen, was unter ihm enthalten ist)」(『純粹理性批判の無用論』VIII 199 Anm.) と述べる。要するにカントが言おうとしているのは、一般的な概念の形成は、諸事物に共通な何かを抽出する作業ではない、ということである。むしろ論理的抽象といわれている手続きの真相は、具体的な知覚の源泉である感性を度外視すること、すなわち捨象である。ライブニッツやヴォルフのように、概念的認識を認識一般の基礎に据えた上で、捨象と抽象を取り違えて、感覚的知覚と概念的認識を連続的に捉えるならば、感覚的知覚(およびその制約である直観の形式)の固有性を把握することは決してできない。その場合感覚的知覚はあくまでも概念的認識の欠如態として理解されざるを得ない。以上が「捨象／抽象」に焦点を絞ってなされる「単なる概念」の批判の内実である。

二・二 肯定的に取り扱われる「単なる概念」

これまでの考察から「単なる概念」に依拠する立場は、講壇形而上学における認識の仕方として特定可能であることが示された。否定的に取り扱われる「単なる概念」に関してカントは、その真相を暴露するという仕方の叙述を行っている。それゆえ①総合判断の条件であり、②対象の現存在を直接的に確保し、③感覚的なものの根源をなす、と誤って看做されていた「単なる概念」には、結果的に①総合判断、②対象の現存在、③感覚的なもの(直観に基づく認識)。

とはまったく無関係であるとの宣告が下されたことになる。

しかし「超越論的方法論」（以下「方法論」と略記）において、カントは「単なる概念」をまったく別の文脈で用いている。そこで「単なる概念」はカント自身の主張を説明するための道具立てに変貌している。例えばカントが「……超越論的命題〔sc.「生起するすべてのものはその原因をもつ」等の命題〕は、単なる概念にしたがう総合的認識〔ein synthetisches Vernunftkenntnis nach bloßen Begriffen〕である……」（A722/B750）と述べる場合や、少し表現は異なるが「たしかに純然たる概念だけからの超越論的総合とどうもの（eine transzendentale Synthesis aus lauter Begriffen）があり、これはこれで哲学者にしか成功しないものである……」（A719/B747）と述べる場合、「単なる概念」はこれまでに検討した用例の場合とはまったく異なるステータスが与えられていることは明らかである。先にあげた引用からもわかるように、「単なる概念」はここで経験的に使用されるカテゴリーという意味で用いられている。「単なる概念」のこの変貌をどのように理解すべきだろうか。

ここで考えられるのは、「方法論」に至ってカントの叙述が、これまで批判の対象であった「単なる概念」の次元に戻ってきているのではないか、あるいは同じことだが、「方法論」の叙述がすでに「批判」から「形而上学」への移行を示しているのではないか、ということである。結論を先取りするならば、肯定的に捉えられる「単なる概念」と否定的に捉えられる「単なる概念」は、〈前以て与えられている〉という特徴を持つという点で符合する。

まず〈前以て与えられている〉という特徴を、否定的に取り扱われる「単なる概念」に関して確認してみよう。これまでの考察を踏まえて、「単なる概念」に依拠する立場（「講壇形而上学」）の基本的な特徴を抽出するならば、それは〈対象についての概念〉の成立（「総合」）を飛び越して、前以て与えられた〈対象〉から出発する立場と理解することができる。分析判断に関する講壇形而上学の誤謬についてカントが述べている箇所を手掛かりにして、これを裏付けてみたい。

カントは「序論」において、分析判断と誤ってみなされるものと、本来的な分析判断とがどのように混同されるか、という問題を取り扱っている。カントはこの原因を、これまでの哲学の手続きのほとんどの部分が「私たちが対象について、でもって、いる概念の分析」(A5/B9 傍点筆者)であった、という点にみる。つまり講壇形而上学は「対象についての概念」が成立する局面を飛び越して、与えられた「対象についての概念」(換言するならば、その概念的実質がすでに確保されている「対象についての概念」)を分析していたがゆえに、総合判断と分析判断の区別を見落とした、とカントは考える。与えられた概念を出発点にする場合、総合判断と分析判断は、それが真であるかぎりにおいて、どちらも同等に確実なものとして看做されうるし、その主語・述語の結びつきは必然的なものとして理解されうる。結果的に、総合判断によって確保されるべき述語も、分析判断によって確保される述語も、ともに主語概念に内属するとみなされてしまう。総合判断に固有の制約に眼を向けるためには、「対象についての概念」の成立の場面に立ち会わなければならない。カントが『純粹理性批判』の問題を「ア・プリオリな総合判断はいかにして可能か」と定式化したことは、彼が前以て与えられた「対象についての概念」の次元の手に立ち戻って、その成立の局面を取り押さえようとしたことと本質的に連関している。

以上のことから、否定的に取り扱われる「単なる概念」には、前以て与えられているもの、「表象の総合」の後に来るべきもの、ないしはそれを度外視しているものという性格を見出すことができる。「対象についての概念」を与えられていると看做すことは、②概念とその対象の現存在の区別の看過、③概念と直観の区別の看過、という講壇形而上学の残り二つの特徴とも表裏をなしている。なぜなら与えられた「対象についての概念」を出発点とする限り、概念とその対象の現存在の区別、およびそれらの関係はあらためて問う必要がないからである。また概念と直観とを認識の判明性の度合いによって区別する手続きも、そこで表象の「分析」が直観から概念への通路を確保しており、原理的にはすべての表象が判明な概念へともたらされうる以上、既に与えられている「対象についての概念」を前提としているの

である。

次いで肯定的に取り扱われる「単なる概念」において「与えられた」という特徴が見られることを確認しよう。「方法論」第一篇第一章「独断的使用における純粹理性の規律」においてカントは、「与えられた概念」から出発する立場を採ることを明示している。

……哲学は与えられた概念の分析であるから、この概念が、たとえ混濁しただけのものであるにすぎないとしても、先頭に立つ、そして完備的ではない論究 (Exposition) が完備的なそれに先行する…… (A730/B756)

そしてカテゴリーもまたこの前提のもとで、総合の機能としてではなく、何ものかを「表示する (bezeichnen)」概念として、すなわち、その内実がすでに確保された概念として捉えられている。

……実在性、実体、力等の超越論的概念が私に与えられている場合、そうした概念が表示するのは……単に (ア・ブリオリには与えられない) 経験的直観の総合ではない (A722/B750)

以上のことから、カントは「単なる概念」に基づく認識を否定しながらも、「与えられた概念から始める」という、その手続きの基本的な部分を自らの批判の目的地としていることが分かる。講壇形而上学の存在論とカントが目指すものとして「超越論的哲学」という同一の名称が付与される理由の一つがここにある。

だがカントは単純に講壇形而上学の立場に還帰したわけではない。「批判」は見せかけの「超越論的哲学」から真の「超越論的哲学」への移行である。それゆえ二種類の「単なる概念」はやはり、「どこかわずかに位相がずれているためにびったりとはかみ合わない二つのものの重ね書き⁽²⁰⁾」として理解されるべきものであろう。ではそのズレとはなにか。

またこれまでの考察の成果を「超越論的分析論」の手続きと照合するならば、もう一つの疑問が出てこざるを得ない。カントの認識批判の核心は、「カテゴリー超越論的演繹」の手続きにみられるように、経験の対象の可能性の制約としてカテゴリーを理解することである。その場合、カテゴリーとは「一つの直観におけるさまざま表象の単なる総合に

統一を与える……機能」(A79/B104f.)と説明される。だからこそ「すべての対象一般をフェノメナとヌーメナに区別する根拠について」(A235ff./B294ff.)において、「カテゴリーそれ自体は〔実在的には〕定義されない」(A245)とも言われていたのではなかったか。機能としてのカテゴリーを、「概念の分析」の対象となるもの(つまり *S. 181 P.* という仕方でも定式化できる概念)へともたらず、ということとはどのような意味で理解すべきだろうか。

そこで次節では、カテゴリーを「概念の分析」の対象となりうるものへもたらずということが何を意味するのか、そして新たに確保された「単なる概念」とは何なのかを、「カテゴリーの形而上学的演繹」、「カテゴリーの超越論的演繹」(以下「演繹論」)、「純粹悟性概念の図式論」(以下「図式論」)の叙述を手掛かりに具体的に探ってみたい。⁽²¹⁾このように『純粹理性批判』の目的地から翻って上述の三つのパートを読解することは、各パートの役割を明確化することにも繋がる。

三 「物一般」から「対象一般」についての概念」へ

カントが『純粹理性批判』を講壇形而上学の存在論の捉えなおしのプログラムとして考えていたことは、カテゴリーの説明からも理解できる。カテゴリーは「対象一般」についての概念(Der Begriff von einem Gegenstande überhaupt)』(A280/B346)と言われるが、カントがこの語を講壇形而上学の存在論において中心的な概念だった「物一般(Ding überhaupt/ens in genere)」を念頭において用いていることは疑い得ない。一八世紀、存在論において用いられる「存在者(ens)」という語は通常ドイツ語では「物(Ding)」という語に翻訳されていた。例えばヴォルフは存在論を「存在者一般の学(scientia entis in genere)」⁽²²⁾と定義しているが、彼のドイツ語の著作では存在論の課題を「なにが一切の物一般(alles Dinge überhaupt)に所属し、なににおいてそれら物一般の区別が見出されるのか、吟味する」⁽²³⁾ことと言いつている。カントは『純粹理性批判』において「物一般」という概念を基本的には批判の対象として用いるが、

「対象一般」とほとんど区別せずに用いる場合もある (A144/B183, A719/B747)。

加えて指摘しておきたいのは、講壇形而上学の存在論においても、「物一般」に関わる概念に *transcendentais* という語が付されていた、ということである。²⁴⁾ カントが講壇形而上学の存在論を「超越論的哲学」と呼ぶ根拠はここにある。それゆえ「物一般」の内実を捉えなおす手続きは「超越論的哲学」の捉えなおしと直接的に関連していると考えられる。以上のことに基づいて、カテゴリーの本来的な機能を明らかにする「カテゴリーの形而上学的演繹」、「演繹論」、「図式論」は、講壇形而上学の存在論の基礎概念を、客観的妥当性を有する認識の可能性の制約として読み替えていくプログラム、あるいは同じことだが「超越論的哲学」を換骨奪胎するプログラムの核心部であるといえる。

三・一 概念と対象の関係

まずカントが概念と対象との関係をどのような構図のもとで理解していたのか、「カテゴリーの形而上学的演繹」の叙述に即して確認しておこう。カントは概念と対象との関係を、二項関係で考えたのではない。それはつねにある概念 (A) がその徴表 (B) を介して、対象 (C) に関わる、という三項関係のもとで理解されている (この場合、徴表 (B) は、対象 (C) の概念の徴表でもある)。要するに *A: B: C* という判断を下すことが、ある概念 (A) と対象 (C) との関係を確保することなのである。どういふことだろうか。一般論理学の枠組みに即して、この三項関係の内実について考察してみたい。

カントにおいて「唯一直観を除いて、いかなる表象も直接的にその対象にかかわることはない……」 (A68/B93)。概念が直接的に関係づけられるのは、対象を特徴づける何らかの徴表である。例えば「この対象は物体である」という判断が成立するということは「すべての物体は分割可能である」という判断を通じて、分割可能性という性質を持つある対象が物体とみなされる、ということにはかならない。

……物体という概念は、この概念のもとにほかの諸表象が含まれていて、それらの諸表象を介してこの概念が諸対象と関係しうる、ということによってのみ、概念となる (A69/B94)

このように、「すべての物体は分割可能である」という判断を介して、間接的に物体の概念と対象が関係づけられることを前提としてはじめて、この対象（たとえばこの金属）は物体であるという対象と概念の関係（カントの言葉でいうと、「物体の概念がある対象の可能的な述語となること」が成立するとカントは考えている。このような意味において、カントは判断において、ある概念のもとに諸々の対象が統一（包摂）されると看做す。「判断における統一の機能」(A69/B94)とはこの意味で理解されなければならない。

三・二 「物一般」と「抽象」

一般論理学は、「認識のすべての内容を捨象して、どこからにせよ、他所から表象が一般論理学に与えられ、そして、この与えられた表象がまず概念へと変容させられることを期待する。これらの手続きは分析的に行われる」(A76/B102)。それゆえ、一般論理学においては上述の概念・徴表・対象の三項関係はもっぱら分析的に（すでに与えられた概念に基づいて）成立する。たとえば「すべての物体は分割可能である」という判断を介して、物体概念のもとに包摂されうる諸対象は、あらかじめ分割可能性という性質を所有している、というわけである。

このような一般論理学の判断の統一作用を「抽象」と理解し、存在論的に用いるところに、講壇形而上学の基礎概念、「物一般」の出自があることは疑い得ない。講壇形而上学を含め、アリストテレス以来の抽象論において、一般概念は「異なった諸事物のうちにある共通の徴表を抽象する」ことによって成立すると理解されていた。この手続きを階層づけていくことは、必然的にひとつの「概念のピラミッド」⁽²⁵⁾を形成することに通じる。たとえば金、銀、銅などにみられる共通の徴表が抽象されて、「金属」という一般概念が作られ、この金属の概念がさらに高次の「物体」概念のもとへ

と包摂される。このような概念のピラミッドにおいて到達可能な最も普遍的な概念が、「物一般」であろう。「物一般」は概念のピラミッドに属するすべての概念の包括する概念であり、そしてその一般的な特性は、すべての存在者に共通な要素として、根源的な特性であるはずである。ここにおいて講壇形而上学は、「存在しうる限りでの可能なものに關する学 (*scientia possibilium, quatenus esse possunt*)」⁽²⁶⁾という自らが掲げた「哲学」の要件を満たしうる地点に立つ。

しかしこの抽象の手續が実際には、カントが暴露したように「共通的な徴表としてある概念を抽象するのではなく、ある概念の使用においてその概念のもとに含まれている差異を捨象する」ことだったとしたらどうか。この概念の系列を遡っていくということは、それまで維持してきたいくつかの徴表を断念することと引き換えに、より広い対象領域を統一の射程におさめているにすぎないことになる。「物一般」はすべての概念を包括するが、単に一般論理学に即して確保される規定しかもたない空虚なもの、ということになる。そして問題は「空虚なる根源」ということにはとどまらない。「物一般」、すなわち一般論理学のみに依拠しているかぎり、われわれは経験に決して到達することができない。経験のために必要な感覚的知覚固有の制約は、認識能力の区別という手續きによってはじめて確保される、一般論理学とは異質、且つ根源的な制約である。それゆえ一般論理学の制約に依拠する者は、認識能力の区別という手續きを経ない限り、あくまで経験とは異質な領域のうちにとどまらざるを得ない。「物一般」は「空虚なる根源」であるばかりでなく、人間の有限的な認識の仕方を看過し続けることの根拠でもある。

三・三 総合と総合判断

この講壇形而上学の問題性を引き受けたカントが取り組むのは、人間の有限的な認識の仕方を飛び越さずに、「対象一般についての概念」をいかに確保するか、という課題である。さて、この課題の遂行の核心は、一般論理学における「概念の分析」の手續きの前提を問うことにある。

すでにみたように一般論理学における判断の統一作用(包摂作用)は、すでに与えられている表象を前提にして、分析的に行使される。たとえば「すべての物体は分割可能である」という判断を介して、「分割可能性」という性質を持つ諸々の対象が物体の概念のもとに包摂される。しかし「分割可能性」という性質をもつ対象が与えられていることは、いったいどこで確保されているのだろうか。カントは概念の分析に先立って表象が与えられるために、認識を成立させる働き、すなわち「総合(Synthesis)」がなければならぬ、と考える。(cf. A77/B103)

さて概念の分析に先立って総合という働きがあることに気づくことは、判断の問題と本質的に連関している。⁽²⁷⁾ 総合自体は「構想力の単なる作用」であるが、それが概念にもたらされてはじめて認識が成立する (cf. A78/B103) 以上、概念の使用をぬぎに総合を語ることはできない。そして一般に概念の使用は判断であるから (cf. A68/B93)、「総合」の問題は「判断」の問題として理解されるはずである。つまり、ある概念(A)がその徴表(B)を介して、対象(C)に関わる、という三項関係が総合においても見出されるはずである。「一つの判断において様々な表象に統一を与えるのと同じ機能が、一つの直観における様々な表象の単なる総合に統一を与える……」(A79/B104f.) という文言はこの意味で理解されなければならない。

ここで三角形に関するア・プリオリな総合を例にして考えてみたい。三角形の総合を判断の側から見るならばそれは、△三角形は、その内角の和が一八〇度に等しい」という三角形の概念を代表する総合判断を通じて、具体的に認識される図形が、三角形として規定される、ということになる。しかしこの判断における主語から分析的に〈内角の和が一八〇度に等しい〉という徴表はでてこない。これは総合判断である。三角形の概念に含まれているのは、〈内角の和が一八〇度に等しい〉という述語に結び付く必然性だけであって、すでにこの述語が三角形の概念に内在しているのではない (cf. B17)。直観において具体的に△三角形を描出することを介してはじめて、△三角形一般という主語が〈内角の和が一八〇度に等しい〉という述語に結び付けられる。総合の局面における概念と対象との関係とは、双方向的な規定と

して理解される。対象は概念によって規定されるが、概念はその対象の規定を通じてはじめて、その対象についての徴表を主語である自分に関係づけることができる。⁽²⁸⁾

カントが概念を「規則 (Regel)」として捉える場合、規則とはこの種の総合判断として理解することができる (cf. A106, A140f./B179)。認識対象の成立においてはこの規則が、表象の総合が任意のものではなく、ある必然性を持って行われるための制約となる。

このようにカントは総合が概念にもたらされる場面では、同時に、その概念を主語とする総合判断が成立しているとみる。総合と総合判断とが不可分であるということは、総合の制約となるカテゴリーも、もしその権利が確保されたならば、それ自体ア・プリオリな総合判断として姿を現す、ということの意味する。たしかにカントの手続きは、与えられたへ対象についての概念への手前で、へ対象についての概念への成立の場面を問題とするわけだが、同時にその成果はア・プリオリな総合判断として、言い換えるとへ与えられた概念へとして獲得されるのである。

三・四 図式論の意義

総合と総合判断とが表裏一体の関係にあるということを理解するならば、「純粹理性批判」解釈における一つの難所、「図式論」の意義について見通しをつけることができる。⁽²⁹⁾

これまで述べてきたことから明らかのように、判断は、「カテゴリーの形而上学的演繹」、「演繹論」、「図式論」という一連の展開を貫く枠組みをなしている。ある概念 (A) がその徴表 (B) を介して、対象 (C) に関わる、という三項関係に即して言えば、「ア・プリオリな諸概念が対象に関係しうる仕方」(A85/B117) を解明する「演繹論」は、カテゴリー (A) と対象 (C) との関係を確認するという課題を引き受けるパートとして理解することができる。この関係付けが実際に成功したならば、裏面において今度は、カテゴリーとその徴表 (これは対象の概念の徴表でもある) と

の間に成立する総合判断が確保されなければならない。概念の使用が判断以外にはありえず、カテゴリーが「純粹悟性概念」として認識の対象と関わるものである限りにおいて、カテゴリー自体が、判断の形で定式化されうる概念へと復帰する必然性がある。「図式論」はカテゴリーとその表徴との間に成立する総合判断（カテゴリーについての「哲学的定義」³⁰）を確保して、それを通常概念と同一の水準へと復帰させる役割を担うのである。

「図式論」の冒頭でカントは現象に対するカテゴリーの適用可能性の問題を「純粹悟性概念のもとへの経験的直観の包摂 (Subsuntion)」(A137/B176) という仕方 で定式化しているが、これは決して不適切な問題設定ではない。ここで「包摂」は、カテゴリーと直観という二項関係においてではなく、カテゴリー・超越論的時間規定・直観という三項関係において考えられているのであり、カテゴリーと直観とを結びつける「第三のもの」(超越論的時間規定) とは、カテゴリーが直観に関係するための要件である、カテゴリーの徴表として理解することができる。

このように「カテゴリーの形而上学的演繹」、「演繹論」、「図式論」の三つのパートは、判断における三項関係に基づいて理解されるべきである。この一連の展開において、判断は、前提された認識対象の内的構造を事後的に表示するもの(つまり、「講壇形而上学」での判断のあり方) から、認識対象をまず総合するもの、すなわち対象の「可能性の制約」へと変貌していくのである。

しかしカテゴリーを定義することがそもそも可能なのだろうか。なるほどカントは「フェノメナとヌーメナ」の中で「カテゴリーそれ自体は〔実在的には〕定義されえない」と述べているが、その主張の裏づけは、カテゴリーを定義しようとするならば、おのずとそこに感性的な契機が入ってこざるを得ない、という仕方 でなされる (cf. A241ff.)。その箇所 でカントは、カテゴリーのそれぞれの定義を実際に行つて、定義が直観の介入なしには成立しえないことを実証するが、ここで示されるカテゴリーの定義とは、ほぼ図式の内容に符合する。

……悟性の概念としての量 (quantitatis) の純粹図式は数であつて、数は一を一に順次加算することを包括する一

つの表象である (A142f./B182 「図式論」における「量」の図式)

……量は、一が何回そのものにおいておかれているかがそれによって思考されるところの物の規定である、という仕方以外では、誰も量一般の概念を定義する (erklären) ことはできなう。(A242/B300 「フォンメナとヌーメナ」における「量」の定義)

要するに図式化とは、カテゴリーが定義可能なもの、つまり「概念の分析」の対象になる唯一の手段なのである。そしてここで確保されるものが、カントが肯定的に取り扱う「単なる概念」であるといえよう。「方法論」ではカントは、「原因 (Ursache)」の概念の使用に関して次のように述べている。

……私は単に概念にしたがって (blos nach Begriffen) 手続きを行うのであって、概念の構成によって手続きを行うことはできない。なぜならこの概念は、諸知覚の総合の規則であり、諸知覚はいかなる純粹直観でもなく、それゆえにア・プリオリに与えられないからである。(A723/B751 Anm.)

だが、このように新たな「単なる概念」の所在が、カテゴリーの図式化において見定められるとして、この「単なる (blos)」という形容詞の意味はどのように理解すべきだろうか。それは、哲学的認識に対する「規律 (Disziplin)」すなわち「ある規則から逸脱しようとする絶え間ない傾向を制限し、ついには根絶する強制」(A709/B737) の意味において理解すべきであろう。捉えなおされた「単なる概念」とは、「図式化」という悟性の「手続き (Verfahren)」自体を取り押さえるための術語であるが、この手続きは直観をア・プリオリに可能にするものではなく、この手続きが可能にする経験を媒介にしてはじめて成就するものである。別の言い方をするならば、「超越論的な命題は自らの概念の一つをすら、いかなる場合においてもア・プリオリに描出できない」(A721/B749)。「単なる概念」は、このような人間の認識の有限性を告示するものとして、その新たな意味を獲得するのである。

おわりに

以上、カントの「超越論的哲学」の解明の端緒として、「単なる概念」について、特にその大きく分かれる二つの意味に着目して考察を行った。

カントが「単なる概念」を否定的に取り扱う場合、それには講壇形而上学の手続きの基礎という役割が担わされている。この場合「単なる概念」は①総合判断と分析判断の区別、②概念とその対象の現存在の区別、③概念と直観の区別という三つの区別を看過させる誤謬の源泉として取り扱われている。しかしカントは「単なる概念」を全面的に斥けたわけではなかった。「方法論」において、「単なる概念」は「批判」の到達点として新たなステータスを与えられる。この「単なる概念」が否定的に捉えられる「単なる概念」から引き継いだのは、へすでに与えられているという性格である。つまり「批判」の到達点とは、「概念の分析」が開始されうる地点として理解されうる。この到達点から翻って「超越論的分析論」の中心部を見ることは、「概念」の使用、すなわち「判断」という枠組みのもとで各パートの役割を再検討することに繋がる。カントの判断論の基本的構図、「ある概念(A)がその徴表(B)を介して、対象(C)に関わる」に照らして、「演繹論」と「図式論」の役割分担を考えるならば、「演繹論」は、(A)と(C)の関係付け、「図式論」は(A)と(B)の関係付けを課題とすることが理解できる。「図式論」は判断を通じてカテゴリーを定式化する(すなわち「哲学的に定義する」)課題を担うパートであり、新たな意味での「単なる概念」を確保する現場である。図式化されたカテゴリーこそが「単なる概念」、すなわち真の「超越論的哲学」の出発点をなす。

本稿の考察は、「概念」の確保を「純粹理性批判」の到達点として理解し、そこから翻って「超越論的分析論」の各パートの役割について考察した。この解釈は、「純粹理性批判」の最上位の区分、ElementarlehreとMethodenlehreにカントが与えた意味からも裏付けられる。『オプス・ポストゥムム』においてカントはElementarlehreの役割が

学に必要な基本要素 (Element) すなわち基礎概念の確保に、Methodenlehreの役割をそれらの概念の配列にみている (cf. XXI 386)⁽³¹⁾。「概念」の確保を『純粹理性批判』の到達点としてみるということは、「概念の使用」、すなわち「判断」を軸としてこの著作全体を解釈する方向性を開くことにもなる。「判断」は、カテゴリーを導出するための単なる「手引き」でもなければ、カントがいわゆる「沈黙の一〇年間」の思考の成果を纏め上げるために用いた道具立てでもない。それは「超越論的分析論」の核心部の展開をも規定する、『純粹理性批判』の最も基礎的な枠組みとして理解すべきものである。

注

- (1) 村田純一、項目「超越論的哲学」『岩波哲学・思想事典』岩波書店、一九九八年、一〇八七頁。
- (2) Salomon MAINMON, *Versuch über die Transzendentalphilosophie, Gesammelte Werke Bd.2*, Hildesheim 1965, S. 3.
- (3) カントからの引用は、アカデミー版カント全集の巻数(ローマ数字)と頁数(アラビヤ数字)を括弧内に記す。ただし慣例に従って『純粹理性批判』からの引用は、A版Ⅱ第一版とB版Ⅱ第二版の頁数を記す。
- (4) Cf. Alexander Gottlob BAUMGARTEN, *Metaphysica* (in: XVII), §7, Christian WOLFF, *Philosophia prima sive Ontologia, Gesammelte Werke II*, Abt. Bd. 3, Hildesheim 1962, § 79.
- (5) その他「カントロジーの形而上学演繹」のB版固有の箇所 (B113) では「古人の超越論的哲学 (die Transzendentalphilosophie der Alten)」という文言がある。この箇所ではカントは「モラ哲学者たちのあつたで極めて有名な命題」を主題化しているが、実際上の論敵は講壇形而上学である。 Cf. Hans LEISEGANG, *Über die Behandlung des scholastischen Satzes: „Quodlibet ens est unum, verum, bonum seu perfectum“, und seine Bedeutung in Kants Kritik der reinen Vernunft. in: Kant-Studien*, Bd. 20 1915, S. 401-421.
- (6) はとんどの場合、この語は aus, nach, bei, などの前置詞とともに用いられる。それはカントが、「単なる概念」の使用がもたらす帰結、つまりこれに基づいて構築される哲学的立場のうち特に問題性を見いだしていたからにはかならない。

- (7) ハイムゼートは、そのコメントリーのなかで、両方の「単なる概念」について解説してはいるが (Cf. S. 110, 112, 252, 656ff.) 両者の関係について検討してはいる。Cf. Heinz HEIMSOETH, *Transzendente Dialektik, Ein Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Berlin/New York 1967-1971.
- (8) 否定的な意味で用いられる「単なる概念」については、次の論文が論じている。福谷茂「存在論としての「先天的総合判断」『理想』(六三五号、一九八七年)五一一-六二頁。
- (9) 肯定的な意味で用いられる「単なる概念」については、次の論文が論じている。大橋容一郎「概念の位置について——『超越論的方法論』の主題に関する考察——」『現代カント研究——超越論的哲学とはなにか』(理想社、一九八九年)一六三—二〇一頁。
- (10) 「形而上学、すなわち経験が教えることを全面的にきけずみ、しかも単なる概念によって(数学のごとく概念の直観への適用によってではなく)きげすむ……」のせつたく孤立した思弁的理性認識……」(B. XIV)。
- (11) 本稿では検討できないが、「単なる概念 (der bloße Begriff)」という言い回しは「弁証論」ではなくは誤謬の温床として登場する (cf. A353, A361, A366, A456/B484, A607/B635)。
- (12) 講壇形而上学の存在論については、次の文献を参照した。Cf. Gottfried MARTIN, *Immanuel Kant — Ontologie und Wissenschaftslehre*, Berlin 1950 1969², 290ff. 山本道雄「クリスマティアン・ヴォルンの論理学思想について」『ラテン語論理学』の概念論・判断論「真理論を中心にして」『文化学年報』(第一四号、一九九五年、神戸大学大学院文化学研究科)一〇五—一六六頁。
- (13) Gottfried Wilhelm LEIBNIZ, *Discours de Métaphysique in: die Philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz* Bd. IV, Berlin 1880, p. 433.
- (14) 山本「前掲論文」一四八—一五二頁、を参照。
- (15) Christian WOLFF, *Philosophia rationalis sive Logica, methodo scientifica tractata. Praenuntium discursus praenuntians de philosophia in genere*, Frankfurt u. Leipzig 1728 1740³, § 216.
- (16) Cf. Wolff, *Logica*, § 262, 267, 275.
- (17) Christian WOLFF, *Discursus praenuntians de philosophia in genere in: Philosophia rationalis sive Logica, methodo scientifica tractata. Praenuntium discursus praenuntians de philosophia in genere*, § 73. (翻訳として、以下を参照。クリスマティアン・ヴォルン(山本道雄・松家次朗訳)『哲学一般についての予備的叙説』「ヴォルンの論理学思想について」『ラテン語論理

学』の概念論、判断論、真理論を中心に(2)、『文化学年報』(第一五号、一九九六年、神戸大学大学院文化学研究科)所収。) (27) Cf. Gottfried MARTIN, Kants Auseinandersetzung mit der Bestimmung der Phänomene durch Leibniz und Wolff als verworrene Vorstellung, in: *Kritik und Metaphysik/Studien Heinz Heimsoeth zum achtzigsten Geburtstag*, Berlin 1966, S. 99-105.

(19) カントはマイヤーの『論理学綱要』を論理学講義のテキストとして用いていた。『論理学綱要』はアカデミー版カント全集第一六巻に収録されている。

(20) 大橋、前掲論文、二〇〇頁。

(21) 以下、考察は専ら「純粹理性批判」の第一版を対象とする。第二版での書き換えの問題については本稿では論じることとはできないが、「概念」がこの書き換えの意味を考える上での手がかりとなることを指摘しておきたい。第二版で大規模な書き換えが行われた箇所(「序論」の「超越論的」の定義(A112/B25)、「カテゴリーの超越論的演繹」(A95ff./B129ff.)、「フュンクショナルメナ」(A235ff./B294ff.)、'「純粹理性の誤謬推理」(A341ff./B399ff.))は、共通して、第一版で言う「概念」と「対象」との関係を中心とした議論が展開されているポイントである。

(22) Wolff, *Ontologia*, § 1.

(23) Christian WOLFF, *Vernünftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes und ihrem richtigen Gebrauche in Erkenntnis der Wahrheit*, Gesammelte Werke I. Abt. Bd.1, Hildesheim 1965, S. 119.

(24) Wolff, *Ontologia*, § 329, §§ 472-530.; Baumgarten, *Metaphysica*, §§ 72-100.

(25) Cf. Ernst CASSIRER, *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchungen über die Grundfragen der Erkenntnistheorie*, Berlin 1910 Darmstadt 1980^s, S. 7.

(26) Wolff, *Discursus praeliminaris de philosophia in genere*, § 29.

(27) 総合と総合判断の関係については、次の論文を参照。森口美都男「超越論的演繹の生成——一七七〇年代のカント——」『世界の意味を求めて』(見洋書房、一九七九年)二一六—二四五頁。

(28) 経験的概念に基づく「総合」は、純粹感性概念やカテゴリーと同じ枠組みで説明することができない。例えば物体という経験概念は、その成立においてすでに直観との関係を前提にしている(「経験的概念は……構想力の図式といつても直接的に連関す

る」(A141/B180)。「それゆえ延長、形態、不可侵入性を物体に述語づける判断は、分析判断としてみなされもする (cf. A8/B12)」。しかし、延長、形態、不可侵入性という物体の性質が直観との関係を通じてはじめて確保されるものである限り (cf. A20f./B35)、「物体の概念に基づく総合も、総合判断を前提にしてのみ考えらるべきである」。 Cf. George SCHRADER, *Kant's Theory of Concepts, in: Kant-Studien*, Bd. 49, 1957, p. 264-278.

(29) 「演繹論」と「図式論」の関係をめぐる問題、および諸解釈については、次の論文を参照。長田蔵人「経験の可能性の制約」から「可能的経験」へーカント『純粹理性批判』における演繹論と図式論―『哲学研究』(五八四号、二〇〇七年)六三―八二頁。長田は「演繹論においてへ為されていないこと」に着目してこの問題を論じているが、本稿では、概念・徴表・対象の三項関係を手掛かりにこの問題について考察する。

(30) 「方法論」においてカントは厳密な意味での「定義 (Definition)」は哲学的認識には不可能であると述べている。しかし「論究 (Exposition)」(徴表の「明晰性、十全性」) に関して疑わしいにせよ、ある程度まで概念の分析をすすめていること) を「哲学的定義」として認めよう (cf. A727ff./B756ff.)

(31) Cf. Heimsoeth, *Transzendental Dialektik*, S. 646.

(筆者 さとう・けいた 京都女子大学非常勤講師/哲学史)

tion créatrice), etc. Finalement, nous examinons surtout ces deux points dans cet article. (1) Quelle différence y a-t-il entre la philosophie de BERGSON et celle de BOUTROUX ? (2) Quels usages et quelles fonctions de la contingence sont-elles dans les œuvres de Bergson malgré sa critique envers le concept de la contingence ?

Über die Zweideutigkeit des Wortes „der bloße Begriff“
in *Kritik der reinen Vernunft*
für das Verständnis von Kants Transzendentalphilosophie

by

Keita SATO

Part-time Lecturer
Kyoto Women's University

Heute wird das Wort „Transzendentalphilosophie“ im allgemeinen als die Bezeichnung für Kantische Erkenntniskritik verstanden, die in *Kritik der reinen Vernunft* durchgeführt wurde, und so auch schon zu seinen Lebzeiten. Aber Kant selbst ist anderer Meinung: erstens ist *Kritik* für ihm nicht die Transzendentalphilosophie als solche, sondern nur ihre Vorbereitung (Propädeutik), zweitens kennzeichnet er sogar die Philosophie seines Kontrahenten (der sogenannten deutschen Schulmetaphysik) als Transzendentalphilosophie. Kurz gesagt, kann dieses Wort zwei verschiedene Dinge bezeichnen, nämlich das Angriffs- und Endziel von *Kritik*. Indessen setzt Kant gar nichts davon auseinander, wie die „wahre“ Transzendentalphilosophie sich auf die „scheinbare“ bezieht.

Dieser Aufsatz versucht diese Beziehung anhand des Wortgebrauchs „der bloßen Begriff“ in *Kritik* klarzustellen. Diesem scheinbar unwichtigen Wort verteilt Kant eine entscheidende Rolle: die Redewendung „aus bloßen Begriffen“ charakterisiert die Methode der Transzendentalphilosophie. Dementsprechend hat das Wort „der bloße Begriff“ zwei verschiedene Bedeutungen gleich wie die Transzendentalphilosophie. Es bezeichnet nämlich den Begriff bei der deutschen Schulmetaphysik und den bei Kantische Philosophie.

Aufgrund eingehender Analyse wird deutlich, dass das Merkmal der Erkenntnis aus bloßen Begriffen im allgemeinen das Voraussetzen des Begriffs von Gegenstand ist. Mit anderen Worten muss jene Erkenntnis auf den Begriff als Gegebenes angewiesen sein. Aber folgendermaßen scheiden sich zwei Wege der Erkenntnis

aus bloßen Begriffen. Während die deutsche Schulmetaphysik ohne Rücksicht auf die Synthesis der Vorstellung den Begriff von Gegenstand als schon gegeben ansetzt, fängt Kant mit dem Begriff (Kategorie) an, den die transzendente Analytik gerechtfertigt hat.

Hier stellt sich die Frage, ob die Kategorie als Gegebenes angesehen werden kann. Zwar besteht Kantische Begriffslehre darin, dass die Kategorie als Funktion der Synthesis verstanden wird, aber in Schematismuskapitel definiert Kant sie gleich wie einen normalen Begriff, damit sie als Gegebenes betrachtet werden kann. Diese definierte Kategorie macht das Ansatzpunkt der wahren Transzendentalphilosophie aus.